

第四章：孔子の生涯（２） 知名から晩年迄

【政治家孔子と失脚】

紀元前五百一年、季孫氏、叔孫氏、孟孫氏の所謂「三桓」の嫡子を廃立してしまおうと企んだ陽虎と公山不狃は、季桓子を一旦捕らえるが、策略を用いて逃れられ、逆に三桓一族に攻められて、陽虎は斉に亡命しました。孔子が五十歳ないしは五十一歳の時のことです。

事件のすぐ後に、魯君（定公）は孔子を中都の宰（長官）に任命しました。どういう経過からそうなったのかは、推量できる資料が無いのでわかりませんが、突如、孔子は念願の政治の檯舞台に登場するのです。しかも、「一年にして、四方皆な之に則る。中都の宰より司空となる。司空より、大司空となる」（「史記」・孔子世家）とトントン拍子に檯舞台を駆け上ります。

中都という魯の邑の長官に抜擢されたら、わずか一年で周囲の都市が皆な模範とするほど行政が行き届き、その功績で司空（土木建設長官）、大司空（法務大臣）にまで出世したのです。さすがは雌伏十年、孔子の四十代の懊悩と詩書礼楽の蘊奥は、時を得た百花のように一気にほころび始めます。そして矢継ぎ早の改革と魯公の外交側近としての孔子の活躍が諸国に知れ渡ります。

紀元前五百年、魯と斉の平和会議が開催され、魯の定公は斉公（景公）と両国の中間にある夾谷で会盟しました。孔丘が補佐役で参加します。その模様を「春秋左氏伝」から要点だけ抜粋してみます。

< 斉の黎弥（れいび）が景公に言うには、「孔丘は礼を知れども勇無し。もし萊人（辺境の異民族）をして武器を持たせて魯侯を脅かせば、必ず志を得るでしょう」と。景公はこれに従った。孔子は定公と共に退出して言った。「皆の者よ、武器を執って打ちかけ。両君が好みを交す重要な席に辺夷の俘虜が、武器を以て乱入した。このような非礼を、斉君たる御方が諸侯に命ずる態度とは思えない。無礼者を斬れ」と。斉侯はこれを聞き、にわかに萊人を退去させた。

まさに誓いの宣言を行う段階で、斉側が、宣誓書に文章を付け加えて、「斉軍が国境を出て他国と戦う際に、兵車三百輛を出すと共に斉軍に従わない者があれば、この盟誓の記す通りに罰せらる」と入れると、孔子は、魯の書記官に命じ、揖礼（両手を前に組み合わせる丁寧な挨拶）してこう答えさせた。「そして又、魯国の汶陽の田地を返還しない場合は、同様に罰せられるものとする」と。一方的に斉側に都合のよい文章に楔を打ったのである。

会盟を終わり斉の景公が、定公を饗応しようとする、これ以上長居は危険だと思った孔丘は、斉の責任者に言った。「斉・魯間の旧礼を貴方は御存知ないのか。もう会盟という

大事は終了しました。それなのにさらに饗宴を催せば、そちらを煩わすだけです。しかも礼に則った酒器は国門を出ず、鐘や磬の楽器は野外で演奏せぬもの。かくも大事な会盟に偽礼を行ったとなれば、斉君の恥になります。中止されたがよからう」と。饗宴は取りやめになった。後日斉人は、陽虎の持ち去った鄆・讎・龜陰の田土を返還してきた。>

「史記」・孔子世家では、この場面を、武装した舞蹈団を使って脅そうとし、それを見抜いた孔子が壇上に駆け上がって一喝し、彼らを処刑させた、となっています。いずれにしても、孔子の名声は天下に鳴り響きました。孔子の五十一、二歳頃のことです。

内政面で孔子が改革を狙ったのは、何をさしおいても「三桓勢力の排除」でした。彼らの振舞たるや言語道断、あたかも“^{かなたわ}傍らに人無きが若き（^{ごう}傍若無人な）”僭越行為に満ちたものでした。天子でもないのに八佾の舞を庭で舞わせたり、三家の^{おたまや}廟での祭りに周室で歌う「^{よう}雍」という雅楽で供物を捧げたり、古来、天子が諸侯を集めて山川を祭る「^{ほうぜん}封禪の儀」を執り行う泰山で、たかが国家老の身で「^{りよ}旅の祭り」を行おうとしたり、それはもう僭上沙汰もいいところ。唾棄すべき振舞です。孔子は怒ります。

孔子、季氏を^い謂わく、^{はちいつ}八佾、庭に舞わす、^{これ}是をも忍ぶべくんば、^{いず}孰れをか忍ぶべからざらん。（八佾第三の一）

（孔子が季氏のことを言うには、彼らは八列の舞を庭で舞わせている。許せない。これを黙って忍び、放っておくことができるなら、忍べないものはない、と）

「八佾の舞」というのは、「八列の舞」のことで、礼の定めでは、天子の舞は八佾すなわち $8 \times 8 = 64$ 人で、諸侯の舞は六佾すなわち $6 \times 6 = 36$ 人で、卿大夫は四佾の舞すなわち $4 \times 4 = 16$ 人で舞う決まりがあって、それを季氏が犯した、と憤慨しているのです。

その頃子路や樊遲がすでに季氏に任用されていました。その後も、冉求（冉有）、子貢といった孔子門下生たちが続々と季桓子或はその子の季康子に仕えています。孔子は弟子たちに、季氏の僭越・横柄さを改めさせるべく厳しく叱咤します。たとえば、季氏が泰山で山川を祭る「^{りよ}旅の祭り」をやろうとした時には、冉有になぜ止めさせることができないのだ、とこっぴどく叱っています。（八佾篇）

又、季氏が魯の帰属国である「^{せんゆ}顓臾」という国を攻めて、自分の領地に併呑しようとしたことがあって、子路と冉有が季氏の家臣であることから、それを屁理屈つけて擁護しようとしていました。孔子曰わく、「なぜそんな不正を諫言して止めさせないのだ。昔、^{しゅうじん}周任という優れた官吏だった人の言葉に、力の限り職務に尽くし、それが出来ないならば辞職する、というのがある。今、君たちは季氏を補佐していながら暴挙を手助けしている。とんでもない行為だ。云々」と。（季子篇）

こんなこともありました。季氏が周公より富んでいるのに、冉有がさらに季氏のために収斂（租税の取立て）をして富を増やしている。とんでもない行為だ。孔子は激怒します。

子曰わく、「（冉有は）吾が徒に非ざるなり。小子（諸君）鼓を鳴らしてこれを攻めて可なり。」（先進第十一の十七）

（先生が言われるには、「周王朝の大宰相であった周公より富んでいる季氏に、さらに足し前して富まそうとする冉有は、吾が徒に非ず。生徒でも仲間でもない。小子（後輩諸君）太鼓を叩いて彼を攻めてよいぞ。」と）

孔子は遂に「三桓」征伐に取り掛かります。陽虎が齊に亡命した直後の混乱を修復するという名目で定公と図った作戦と思われます。事の次第を「春秋左氏伝」の記事によって紹介いたします。時は紀元前四百九十八年、孔子が五十四、五歳頃で、子路が季氏の宰となっていた時のことです。

< 仲由（子路）が季氏の陪臣となり、（孔子の進言を受けた定公の命令があったので）三都（＝季孫子の費、孟孫子の成、叔孫子の郕の三都城）を取り壊そうとした。叔孫氏は、郕を取り壊したが、季氏が費を壊しにかかる、費の陪臣の公山不狃・叔孫輒が、費の人たちを帥いて魯の首都・曲阜を襲った。定公は、三氏（季孫子、孟孫子、叔孫子）と季氏の宮に入り、武子の楼台に登った。費人は、これを攻めたが勝てない。費人はさらに定公の近くに攻め込んできた。当時司寇だった孔子は、二人の將軍に命じて楼台の下に降りてこれを攻めさせた。費人は敗走した。政府軍が更に追い詰めこれを敗った。公山不狃と叔孫輒は、齊に出奔、遂に費を取り壊した。残る孟孫子の成は、齊との防衛上の要地で、その必要性を説かれて難航した。最終的には取り壊しは出来なかった。（費と郕を取り崩した功績は大きい）>

もう一つ伝えられている孔子の事跡は、「荀子」・宥坐篇にある少正卯の処刑の逸話です。この話は、「孔子家語」にもあり、「史記」・孔子世家にもそれが史実として取り入れられています。孔子が大司空（法務大臣）に就任後の七日目に、政治を乱した大夫の少正卯を宮殿の下で誅殺して三日間晒しものにした、というのです。誅殺した理由を以下に、「孔子家語」（始誅篇）から紹介します。

< 子貢が参内して曰く、「先生、少正卯は魯では名の知れた大夫です。政治に参与されて早々に処刑とはちょっとやり過ぎではありませんか」と。孔子曰く、「まあ座りなさい。その訳を説明しよう。天下に大悪なるものが五つある。窃盗などはこれには入らない。

第一は、心が邪で悪意に満ちていること。

第二は、行いが偏っていてそれに固執すること。

第三は、言葉に偽りがあって弁明がうまいこと。

第四は、他人の悪事をよく覚えていて広きに亘ること。

第五は、非なることをやってうまく繕（つくろ）うこと。

このうち一つあれば君子の誅罰を免れない。しかるに少正卯はこの五つを兼ね揃えている。私邸では仲間を集めて徒党を組んで勢力を張るは、語れば邪を飾り衆人を惑わす。自己防御に優れ、間違っていることでも押し通してしまう。これすなわち姦雄（かんゆう）というべき悪党だ。だから誅殺しなくてはいけないのだ」と言

こうして孔子は、内政・外交に八面六臂の大活躍をしました。そのため、大司空就任の三ヶ月後には、羊豚を驚（ひさ）ぐものは値段をごまかさず、男女は別々の道を歩き（当時はそれが是とされた）、「塗（みち）、遣（お）ちたるを拾わず（道端に落ちているものがあっても、誰もネコババするものがいなくなった）」。又、四方の諸国から町にやって来た人は、役人に賄賂（わいろ）を与えなくても、欲しいものを手に入れることができるようになった、と「史記」（孔子世家）は述べています。

しかし、孔子を大司空に抜擢して、魯公と「三桓」に、「君臣義あり」の秩序が回復する兆しが見え、国人もそれぞれの「五倫」を実践する風土がようやく萌したかに思えた魯国に、斉の黒い魔手が伸びてきました。「好事、魔多し」とは、こういう時を言うのでしょうか。

斉の国中から選りすぐられた美女八十人が、きらびやかな服装を着け、舞踊団を引き連れて、装飾された馬百二十頭を添えて、魯君に贈られてきたのです。孔子が政治を執っているからには、魯が孰れ覇者になって斉を併合してしまいかねない、という強い懸念から「孔子政権に対する妨害策」の一環として思いついた斉側の「試みの作戦」でした。もし失敗したら斉国の一地区を分け与えよう、と第二弾まで用意していました。が、この「試みの作戦」が図に当たってしまいます。魯側はまんまと引っ掛けてしまったのです。

齊人、女樂（じょがく）を歸（おく）る。季桓子これを受く。三日朝（ちよう）せず。孔子行（き）る。（微子第十八の四）

（齊人が女優舞踊団を魯に贈ってきた。季桓子がこれを受け入れた。そして舞踊団見物に耽溺（たんでき）して、三日（たびたび）朝廷に出勤しなかった。孔子は絶望して魯を立ち去った）

「史記」・孔子世家では、季桓子が身なりを変えて再三見物し、魯公まで巻き込んで城の内外を遊び周り、遂に政務を怠るようになった、と記されています。孔子の落胆振りが目に見えるようです。子路曰わく「先生、もはや去るべき時です」と。孔子も見切りをつけます。そして、辞職願いを提出し、とぎ置きの米の水を捨てて、「遅々として吾れ行く（生まれ故郷を出るのだから、ぐずぐずためらいながら行く）」と言って、後ろ髪を引かれる思いで魯を立ち去りました。（「孟子」・万章篇下） 時に紀元前四百九十六年、孔子五十五、

六歳の頃のこととされています。

【十四年間の流浪時代】

孔子が念願の政治を表舞台で執行することができたのはわずか三、四年のこと。正攻法による理想的かつ急激な改革は、一旦は腐敗要因を駆逐し世を清浄化するかに見えたが、窮屈を嫌い逸楽に狎れ親しんだ魯公や季氏たちの、体質の真髓を入れ替えるまでにはいかなかったようです。この後孔子は、衛を振り出しに、曹 宋 鄭 陳 衛 陳 蔡 楚 衛と歴遊し、魯に帰るまで十四年間もの長きにわたる諸国流浪の旅を余儀なくされることになったのです。以下、「史記」・孔子世家の足取りをベースにして、孔子晩年の生涯を追跡してみましょう。

魯の国情を先に述べておきます。魯公（定公）は、孔子が去った翌年死去し、太子の将、すなわち哀公が即位します。季桓子も数年後に亡くなり季康子が後を継ぎます。季康子は父同様、子路や子貢等孔子門下生を任用し、特に冉有を重用したようです。

孔子が先ず立ち寄ったのが、魯に隣接した衛でした。その後も衛に孔子はたびたび訪問しています。蘧伯玉^{きよはくぎょく}という賢人と友誼を交わしたのがその一因かもしれませんが、魯と衛は兄弟なり、という考えが孔子の中にあっただからでしょう。

子曰わく、魯衛の政は兄弟なり。（子路第十三の七）

魯は前にも述べたとおり、武王から周公が封じられた国です。衛は周公の弟・康叔^{こうしゅく}が封じられた国です。周公は幼い弟・康叔を心配して「康誥」をはじめ三編からなる帝王学を授けました。賢人を尊び民を愛せ、飲酒に溺れるべからず、女性に迷って国を傾けるべからず等がその要諦です。「康叔は国にゆき、これらの訓えを守って、人民を和集したので人民は大変喜んだ」（「史記」・衛康叔世家） 康叔は後に成王から六卿の位の一つである司寇^{しかう}に任ぜられ重用されました。魯と衛はこのように周公と康叔が立派な政治を執り行った伝統ある兄弟国家である、だから両国の政治が乱れていたら共に古きよき時代に復古させたい、という思いが孔子の胸中を去来したのでしょう。

衛は康叔創始後数代にわたり隆盛を誇り、紀元前七百七十一年頃、康叔の治世を手本とした名君・武公が東周王朝の平王を助けて諸侯の筆頭爵位を得て国運のピークを築きます。そして武公の後を継いだ莊公あたりから漸く国は傾き、宣公・恵公で加速し、懿公^{いこう}は「春秋左氏伝」に次の逸話が残るほどあきれた君主でした。そしてその後文公が再建します。

<衛の懿公^いは鶴を好み、鶴に高位高官名を与えたりした。そこで、戦争が勃発すると、兵士たち皆曰わく、「鶴を使え、鶴、実に禄位あり、オレたちがどうして戦う必要があろう

か」と。そんなトンチンカンな君主だったので、北方異民族の狄が衛に攻めて来た時、「衛公その旗を去せず、ここをもって甚しく敗れぬ」。衛の懿公はあえなく戦死した。(紀元前六百六十年)>

<衛の文公は粗末な木綿の衣装や粗末な絹の冠をつけ、「生産に努め、農を訓え、商を通じ、工を恵み、教えを敬し、学を勧め、生活の適宜な方法を授け、賢才に任ず」。その結果、即位当初は兵車が三十乗しかなかったが、晩年には三百乗も備える強国となった。(紀元前六百五十六年)>

そして献公、襄公と続き、襄公の寵愛を受けて身ごもった側室の子・元が、康叔の夢のお告げがあったということで即位して霊公と称しました。紀元前五百三十年のことです。孔子が魯を出奔して初めて衛で仕官の口を求めて面談したのがこの霊公でした。

霊公は孔子に魯ではどのくらい俸禄を得ていたか訊ねます。孔子が粟六万斗だと答えると、衛も同じ禄高にしよう、と早速召抱えられましたが、ほどなく孔子を誹謗する讒言にあって、わずか十ヶ月で衛を後にしました。

ところで、蘧伯玉^{きよはくぎよく}という孔子が晩年にいたるまで交際した衛の大夫のことを簡単に紹介しておきましょう。「淮南子^{えなんじ}」(原道篇)という書物に、「蘧伯玉、年五十にして四十九年の非を知る」とあり、「莊子」(則陽篇)に、「蘧伯玉、行年六十にして六十化す」とあるように、蘧伯玉は三省^{さんせい}・虎変^{こへん}する盛徳の君子でした。すなわち、五十歳になればそれまでの四十九歳までの自分を三省(「論語」にあることばで、たびたび我が身を省みること)し、還暦を迎えてからも虎の皮が美しく抜け代わるように虎変(「易経」の革卦の言葉)した

蘧伯玉が孔子に使いの者を寄こした。孔子が使いの者を席につかせて訊いた。「蘧伯玉殿はどうしておられますか」。使者答えて曰わく「蘧伯玉は、自分の過ちを少なくしたいと努めておりますが、まだできないで三省しております」と。使いの者が退出すると、子曰わく「立派な使いだ。これこそ立派な使いというべきだ」と。(憲問第十四の二十六)

さすがに蘧伯玉の使いだけあって、主人の人柄をよく伝え、本人の応答ぶりも堂に入っている、と誉めたのです。「同気相求む」(「易経」・文言伝)の言葉どおりで、徳ある者には自然と同類が集るものです。蘧伯玉本人についての孔子評は次のとおりです。

(子曰わく、)「君子なるかな蘧伯玉。邦に道あれば則ち仕え、邦に道なければ則ち巻きてこれを懷にすべし」(衛霊公第十五の七)

(先生が言われるには、「君子だねえ、蘧伯玉は。国に道あるときは仕え、国に道なきときは才能をくるんで隠しておける」と)

さて、衛を去った孔子一行は、陳に行こうとして宋国の^{きやう}匡という町を^よ過ぎりました。すると匡の町の人々が孔子を陽虎と見間違えて取り囲み、五日間閉じ込められてしまいます。孔子と陽虎の人相がよく似ていたからです。弟子たちが恐れおののいて孔子の顔色を伺うと、孔子はこう言い放ちました。

（子曰わく）文王は既に亡くなられたが、その文化はこの我が身に伝わっている。もし天がこの文化を滅ぼそうとするなら、後代の我々はこの文化にたずさわれないはずだ。天がこの文化を滅ぼさないからには、匡の人たちが我々をどうすることができようか、と。（子罕第九の五）

私には周の文化を伝道する使命がある。天が見捨てるはずはない、諸君安心しなさい。そう言い切った孔子には、いつしか強い使命感が体内から湧き出るように溢れ出し始めたようです。

思えば突然やってきた政治執行のチャンス到来と失脚という自己関与できない運命、そして流浪の旅の苦難遭遇時に沸々と湧き上がってきた使命感。孔子が晩年語った「五十にして天命を知る」とは、運命と使命感という二つながら同時に混在する「天命」という不思議な形而上的実在をはっきり知覚した、ということではなかったろうか。それが孔子の口について発せられる発端となったのがこの匡での事件だったのだと思います。

事件の結末については、「莊子」・秋水篇によれば、幾許もなくして兵士がやってきて、「失礼致した、陽虎と間違えたことが判明しました。お引取り戴いて結構です」といって、開放されたということです。

その後孔子は匡を去って近くの蒲というところを過ぎ、ひと月余りで再び衛に戻って蘧伯玉の家に身を寄せました。衛には靈公夫人で^{なんし}南子というスキャンダルまみれの淫乱な女性が待ち受けていました。「史記」・孔子世家はその模様を、「靈公の夫人に南子という者あり。使いを立てて孔子へ伝えた。『四方の国々の君子で、我が君と兄弟の交わりを欲する方々は、必ず奥方に会われます。奥方が貴方に是非お会いしたいと申しておられます』と。孔子は辞退したが、やむなく謁見することになった。夫人は^{とばり}帷の中にいた。孔子は門に入ると北面して稽手（丁寧にお辞儀）した。夫人は帷の中から二度会釈した。彼女の^{かんぱい}環珮（腰飾り）の玉擦れのカランと鳴る音がした」と記述しています。

余談ながら、南子と孔子は一体どんな話をしたのでしょうか。無論今となっては知る由もありませんが、文豪谷崎潤一郎が「^{きりん}麒麟」でその会見シーンを想像豊かに書いていますので、ほんの一部分を、ところどころ現代語に変換して抜粋してみます。

<孔子は一行の弟子と共に、南子の宮殿に伺候して北面稽手した。南に面する^{きんしゅう}錦繡の^{とばり}帷の奥には、僅かに夫人の^{しゅうり}繡履（美繡した靴）がほの見えた。夫人が^{うなじ}項を下げて一行の礼に答

える時、頸飾の歩揺（首や髪飾り）と腕環の瓊瑤（数珠）の珠の、相搏つ響きが聞えた。

「この衛の国を訪れて、妾の顔を見た人は、誰も彼も『夫人の額は嬪妃に似ている。夫人の目は褒姒に似ている』と云って驚かぬ者はない。先生が真の聖人であるならば、三王五帝の古から、妾より美しい女が地上にいたかどうかを、妾に教えてはくれまいか」

こう云って、夫人は帷を排して晴れやかに笑いながら、一行を膝近く招いた。>

いくら南子でも、まさかそんな話はしなかったろうと思いますが、とにかくこの会見で不機嫌極まりないのが子路です。先生ともあろうお人が南子が如きに会われるとは、と。

孔子が南子に会われた。子路は不満だった。先生が子路に誓って言われるには、「私がよくないことをすれば、天が見捨てるだろう。天が見捨てるであろう」と。（雍也第六の二八）

孔子には魯で僅かな期間ながら執政の座に就き、理想の政治を行った自負があり、衛でも登用され再挑戦できる機会を与えられることに未練があった。野心を水に流したわけではない。むしろ靈公との謁見チャンスが欲しかったのです。そのためには、靈公と夫人が馬車に同乗し、その後の馬車に孔子が乗って市中パレードすることさえ辞さなかったのです。ぶらり瓢箪の如く吊下がったままで、人に食われず世を没したくなかった。

当時靈公の重臣に王孫賈という大夫が勢力を張っていました。彼は孔子の腹を見透かしたかのように近寄ってきます。世間の諺に、「その奥に媚びんよりは、寧ろ竈に媚びよ」というのがありますが、孔子殿はどうお考えかな、と。言わんとする意味は、家の一番奥にいる神様である靈公や南子夫人におべっかを使うより、下位の神様であるが実用向きの竈の神様である私（王孫賈）に媚を売った方がお得ではないか、という勧誘の言葉なのです。

子曰わく、然らず。罪を天に獲れば、祈る所なきなり。（八佾第三の十三）

（先生が言われるには、「とんでもござらん。奥部屋の神や竈の神よりも、一番敬虔な天に対して罪を得れば、どこにも祈りようがないのです。お誘いお断り申しあげる」と）

南子に溺れ、政務を怠る靈公に一ヶ月も接しているうちに、孔子は、「吾、未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり」（子罕第九の十八）と靈公の醜陋ぶりを吐き捨てるように言って、いよいよ衛を去る腹を固めました。衛靈公篇に一箇所だけ靈公との問答が載っています。

衛の靈公が孔子に戦陣のことを訪ねた。孔子が答えて言うには、俎豆（祭礼に使用する祭器）のことは以前から知っていますが、軍隊のことは未だ学んでおりません」と。翌日孔子は衛を立ち去った。（衛靈公第十五の一）

靈公の関心事は専ら南子と軍事のことです。孔子に訊きたいのは戦陣・兵法のことで、礼がどうの徳がこうのと言う話は齒牙にもかけない（関心外）。孔子は遂に見切りをつけて曹から宋へ向けて旅立ちます。孔子五十七、八歳の頃です。

尚、衛はその後太子の蒯聵と南子の不仲が原因で内紛にまで発展し、靈公の怒りに触れた蒯聵は宋に出奔してしまう。そして靈公が紀元前四百九十三年に亡くなると、太子の息子の輒（出公）が即位します。靈公の在位は約四十年にわたりました。後年、孔子が靈公の無道ぶりを語ると、魯の上卿・季康子が、じゃあ何故失脚しなかったのかと訊ねたので、衛には外交に仲叔圉、祭事に祝鮀、軍事に主孫賈という優れた重臣たちがいたからです、と答えています。（憲問篇）「君君たらずとも、臣臣たり」、が衛の国運を暫くは維持することができたのでしょう。

さて、孔子の一行が、曹から宋に行き、途中で弟子たちを相手に礼の練習を大樹の下でやっている時、宋の司馬（軍事長官）である桓魋がその樹を伐り倒してしまいました。そこを立ち去る時、弟子たちが、「早く立ち去りましょう」と言うと、孔子は「天が我が身に徳をさずけられた。桓魋ごときが私に何ができるものか」（述而篇）と答えました。匡での艱難突破が、益々孔子を徳の伝道者としての自覚に向かわせたようです。

次に一行が向かったのは鄭でした。鄭は名宰相の子産が紀元前五百二十二年（孔子三十歳頃）に亡くなってからは、大国晉と楚に挟まれ、両国の抗争状況と軌を一にして連合・離反を繰り返し、国威無き弱小国に成り下がっていました。孔子が五十八、九歳の頃訪れた鄭は、晉の内紛に巻き込まれて戦乱の最中でした。晉の六卿の范氏と中行氏が引き起こした反乱で、鄭は彼らに救援の兵を送り、かえって韓・魏・趙連合軍に敗れてしまう始末。

そんな鄭に入るや、孔子は弟子たちと離れ離れになり、ひとりで城の外郭の東門のところに立っていました。鄭のある人が孔子を探している子貢に告げました。「東門に人がいました。その人の額は堯に似、その項は皋陶に似、その肩は子産に似ていました。しかし腰から下のたけは禹王に比べると三寸足らず、何か疲れきった様子でまるで『喪家の狗』（葬式があった家の飼犬）』のようでしたよ」と。やがて孔子を探しあてた子貢がそのことを孔子に告げると、「形状のことは別として、『喪家の狗』とはうまいことを言ったものだ」と言って欣然と笑った、と「史記」・孔子世家にあります。

武田泰淳の名著「司馬遷 史記の世界」（講談社版）は、この「喪家の狗」について次のように述べています。

<（孔子は）周遊した天下、いずれのところにも志を得なかったので、ついに「喪家の狗」となったのである。自己を信じながら、その自己を「喪家の狗」と自認しているのは、つまりは、天下に絶望したしるしである。（中略）現代を乱世なりとし、世界を批判の対象と

し、どこまでも否定的態度で終始したため、安んずべき家を喪ったのである＞

或はそうかも知れません。「現代を乱世なりとし、世界を批判の対象とし、どこまでも否定的態度で終始した」という表現は当らぬとしても、少なくとも弟子とはぐれて、鄭の東門に一人佇んでいた時に彼の脳裏をよぎり胸中を去来した心情は、艱難に遭遇した時に見せた強い文化の伝道者意識、すなわち使命感よりは、運命の過酷さと絶望感に覆われていたに違いない、と想像するには難くありません。孔子も人の子です。ある時は運命を呪い、ある時は使命感に燃え、正（運命）・反（使命感）という一種の二律背反的命題の弁証法的思弁を繰り返しながら、最終的に合すなわち人間肯定の止揚へと思想を統合展開していった。先述したように、「五十にして天命を知る」とは、そういうことをいうのではないだろうか。

鄭を去り次に向かったのが陳で、そこに三年くらい滞在したようです。孔子が六十歳前後のことと思われます。陳はもと舜帝の後裔で、舜がまだ庶民だった頃、その徳高きを以て堯が娘を娶らせて生まれた子の子孫を、武王が紂を放伐した後に探し求めて封じた国です。初代を胡公満ここうまんとといいます。陳は春秋時代までは小国ながら特筆すべき大事件にも遭遇せず、歴史的に登場することの少ない国でしたが、紀元前六百年頃に、時の君主・靈公をはじめ三夫二君一子を死なせた所謂「夏姫の禍」あたりから国政が乱れ、国際的にも影響を与え始めます。晉・楚の二強に交々こもごも攻められ、楚の属国であった呉が台頭する遠因を夏姫が作り、その呉に侵され、湣公びんこう在位の紀元前四百八十七年、陳は楚によって一旦滅ぼされます。孔子が陳に滞在していた時がその湣公時代です。

孔子が在留して一年後に、呉王夫差が陳を攻めて三つの城を掠め取って退却しました。そして陳は晉・楚の強国に相変わらず侵され続けます。遂に孔子は戦乱に明け暮れる陳に見切りをつけます。

先生が陳にいて言われるには、「帰ろうよ、帰ろうよ。故郷の魯の青年たちは大志を抱いて美しい織物を為す素地を持ちながら、どう裁断してよいやわからないでいる。帰って彼らを教えよう」と。（公治長第五の二十二）

晉、楚、呉などとの戦乱の絶えない陳にいて、孔子が思うには、「陳公に目通りすることもままならず、会ったところでせいぜい戦陣や兵法の話題がいいところだろう。現在の湣公にあっては、理想の政治論に耳を傾ける余裕や度量を期待する方が無理だ。いっそ故郷の魯に帰って、将来を担わんとする大志をもった若者の教育に専念すべきかもしれない」と。晩節を向かえ、挫折した孔子の政治家への執念が、若き日に志したもう一つの夢であった教育家として生きようとする強いエネルギーに転換し始めたのはこの頃のようにです。

陳を出立した孔子の一行は、最終目的地である楚を目指してさらに衛、陳、蔡を歴遊し、^{しやう}葉の地に辿りつきます。葉の地は楚の属邑（県）で、^{しやうこう}葉公（^{ちんしやうりやう}沈諸梁）が県知事をしていました。この頃齊では景公が亡くなっており、紀元前四百九十年と推定されていますので、孔子は六十一、二歳になっています。

ところで、楚では紀元前五百十六年に平王が亡くなり、次の昭王も病死し（紀元前四百八十九年）昭王の愛妾の子が即位して恵王となりました。時に平王の時に讒言されて国外に亡命していた太子・建が鄭で殺害され、息子の白公・勝が楚に呼び戻されて、父の仇を伐つべく鄭攻撃を企てておりました。暫く後に、令尹（総理大臣）の子西が晉に攻められた鄭から救援を求められた際に、賄賂を受けて加担したことから白公が激怒して子西を殺し、恵公まで幽閉して自立するという白公の乱が勃発します。これを鎮めたのが葉公です。「論語」に孔子と葉公のことが三章載っています。孔子が会った頃の葉公は、まだ昭王在位時代のことです。

葉公が政について孔子に訊ねた。子曰わく「^{よるこ}近き者説^{よるこ}び遠き者来る」と。（子路第十三の十六）

ずっと後になって儒教で尊重された所謂「四書五経」の「五経」が、「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」が、「四書」が、「大学」「中庸」「論語」「孟子」です。この「中庸」に、凡そ天下国家を治めるには「九経」あり、として、修身、尊賢、親親、敬大臣、体群臣、子庶民、来百工、従遠人、懷諸侯を挙げています。

「近き者説ぶ」とは、上の者が身を修め、賢人を尊び、親族を親しみ、大臣を敬い、並み居る群臣を自分の身体^みの如く一体化し庶民を子供のように慈しむことで、「遠き者来る」とは、百工が諸国から往来し、遠くから人が集まり、諸侯を懐けることなどでしょう。短くて要を得たアドバイスです。

葉公が孔子に語って言った。「私の党（^{むら}邑）には直窮なる男がいて、その父親が羊を盗んだので、役人に知らせました。（法令を守ることかくの如し）」と。孔子曰わく、「私の党（^{むら}邑）の正直者とは、それと異なります。父は子の為に隠し、子は父の為に隠します。正直さは自然とその中にあります」と。（子路第十三の十八）

この言葉は後に再度取り上げて述べるつもりですが、孔子六十代前半の円熟味を帯びた、含蓄ある多元的かつ人間本性に関わる重要なアドバイスだと思います。結論だけ申せば、葉公が重要視する法治主義への偏重を衝いた言葉で、「直窮という男が、父親の罪を罪として告発する前に抱くべき人間の性、すなわち子が親の罪を隠そうとする本然の性をも鑑みて、“告発した正直”だけを一方的に賞賛することが妥当かどうかを考えられるべきだ」と言っているように聞こえます。

葉公が子路に孔子のことを訊ねたが、子路は答えなかった。子曰わく、「お前はどうかしてこう答えなかったのだ、その人となりは憤りを発して食を忘れ、楽しみて以て憂いを忘れ、老いの将に至らんとするを知らざるのみ、と」(述而第七の十八)

孔子という人は、現在の乱れた世の中や斗筭(としう)の(器量の小さいつまらぬ)政治家たちに「憤りを発して食事をも忘れ」、古聖賢たちが残してくれた学問を学び教えることで「楽しみて憂いを忘れ」、年老いてくるとさえ気付かずに生きてきた人だ。孔子は子路にそう言わせたかったのです。

「六十にして耳従う」と後日自分を語った孔子は、裏を返せばいつも激情の振幅の激しい性格の人だったように思われます。弟子の子夏が後年「君子に三変あり。これを望めば**嚴然**、これに**即**けば温、その言を聴けば厲し」(子張篇)と表現した姿がまさにこの頃の孔子像ではなかったろうか。

余談になりますが、葉公という人物は、「春秋左氏伝」や「莊子」にも登場する有名人ですが、一方では白公の乱を鎮めた有能な人、他方では「葉公竜を好む」(「莊子」)という故事に残る軽薄な人物、と二面評価のある人です。葉公はとにかく竜が好きで、家中の建物から調度品にいたるまで竜を画かせる程でしたが、本物の竜が現れたら恐れて逃げた、ということで、「葉公竜を好む」とは、「物事をこのむのに、このみかたが軽薄で、真からこのむのでないたとえ」(「新字源」)に使われています。

「春秋左氏伝」にも、白公の乱の征伐に行く途中、ある人が、人民の慕うあなたがもし賊の矢を受けて傷を負ったら大変だから兜を付けて欲しいと言ったので兜を被って進軍した。すると途中である人が、皆はあなたの来るのを待ちわびている、一目見たら勇気百倍するだろうから兜は脱いで欲しいと言ったので再び兜を脱いで進軍した、という話が載っています。子路が葉公の問に答えなかったのは、筋違いの質問をしたからだ、という説もあるのは、葉公が奇癖性で付和雷同する人物であったからかもしれません。

「論語」にはこのように、いついかなる時のいかなる状況下での発言なのかは一切触れていないコマギレ場面が多く、解釈の多様性を生む原因になっています。それが今日まで自在な適応力をもって、我々を想像豊かに「論語」を逍遙させる面白さに繋がっている一因でもあるのだと思います。

さて、孔子一行は葉を立ち去り、再び蔡に戻ります。蔡へ向かう途中、長沮と桀溺(ちようそ けつでき)という二人の隠者が畑を耕しているのに出会いました。舟の渡し場を探していた孔子がそれを見て、子路をやって聞きにいかせました。すると長沮が「あの馬車の手綱を持っているのは誰か」と聞くので、子路が「孔丘です」と答えると「それじゃあ、魯の孔子かね」「ええそうです」「孔子なら何でも知ってるはずだ。渡し場くらい知ってるだろう」と、あっさりあしらわれてしまいました。そこで、今度は桀溺に尋ねると、「世界中のすべてがこの河の

ようにどんどん流れていく。この乱世を一体誰が変えることができようぞ。お前さんも、自分の理想を実現しようと、諸侯を求めて、自分の意見が聞きいれられなければまた新しい諸侯を、と渡り歩く孔子先生なんかに従っているより、我々のように世を捨て、流れに身を任せる輩に従った方が賢明ではないのかね。そういつて種に土をかける手を休めませんでした。子路は仕方なく戻って、孔子にそれを告げました。孔子憮然として言うには、

鳥獸は与（とも）に群を同じくすべからず。吾れ是の人の徒と与にするにあらずして、誰と与にかせん。天下道あらば、丘（孔子）は与に易（か）えざるなり。と。（微子第十八の六）

鳥と獸が生活を共にすることができないように、我々人間は人間以外と暮らさずして一体誰と暮らせというのだ。今、天下は乱れている。乱れた世の中だからこそ、平和な世の実現のために尽力するのが人間のつとめじゃないのか。自分だって、この世に道が行われていたら、何もそれを改める必要などないのだ。蠅螂の斧をかざす孔子の面目躍如たる情景が彷彿します。そして、我々の人生や政治・社会への関わりを考えさせられる名文章です。

孔子が蔡に滞在して三年後、呉の軍が陳を攻撃し、楚は陳へ援軍を出兵し、城父（じょうほ）というところに陣取りました。孔子が陳と蔡の辺りにいることを聞き知った楚王が、使いを出して孔子を招こうとしているらしい、という情報をキャッチした両国の大夫たちが、もしも孔子が楚王（昭王）に重用されては我々にとって不利だと、一行の行く手を阻んで取り囲みました。その時の模様が「衛霊公篇」に記載されています。

陳に在して糧（食）を絶つ。従者病みて能く興つことなし。子路慍（い）って（孔子に）見えて曰わく、君子も亦窮（また）することあるか、と。子曰わく、君子固（もと）より窮（こ）す。小人窮すれば斯（こ）に濫（みだ）る、と。（衛霊公第十五の二）

「君子固（もと）より窮（きゆう）す」から、「固窮（こきゆう）」という言葉が生まれた有名な章です。陳・蔡に取り巻かれて一行は食糧を絶たれ、病人さえ出る始末。暴れん坊の子路が孔子のところにやってきて憤慨して言うには、「先生の日頃の教えどおり、我々は礼や徳を磨き懸命に修養努力しているのにこの窮状です。いかがお考えですか」、と。

すると孔子はこう答えました。「君子固（もと）より窮（こ）す。小人窮すれば斯（こ）に濫（みだ）る、と」。君子だって人間だ。人間であるからには、どんなに修養したところで困窮する時はあるさ。ただ小人は困窮すると自暴自棄になって、何をするかわからんが、君子は乱れないだけのこと。それが重要なのだ、と言って相変わらず学問談義をして、琴を弾いて歌い、平日に異なることがなかった。

「学問談義をして云々」は「史記」・孔子世家にある記事ですが、さらに「史記」では、子路や子貢そして顔回等との固窮論議を付け加え、「莊子」「荀子」などにもこの逸話を敷

衍した物語としてそれぞれ生彩ある内容で取り上げられています。因みに「荀子」・宥坐篇では「小人窮すれば斯に濫る」の後に孔子の言葉が次のよう続いています。

＜「そもそも福に遇うか禍に遇うかは時の運だ。だから君子であっても時に遇わないで不遇に終わる者もある。例えば殷の三仁人がそうではないか。それを思えば、時世に遇わなかった者は私一人ではない。それに考えてもごらん。芷蘭という花は、人知れぬ深山に咲くのを知っていると思うが、人が見ていないからといって美しい花を咲かせねことがあるだろうか。そうじゃあるまい。咲くべき命に生まれついているから、美しく咲くんじゃないか。君子が学問に励むのはそれと同じで、ものごとがうまくいくためとか、出世できるためじゃない。まさに、このように困窮したときにも困くるまず、憂いのあるときも意気消沈せず、福や禍の道理やものごとの終始の有様を熟知して、心の動揺を来たさないためではないのか」と＞

さて、孔子は子貢を楚に使いを出し、昭王の軍隊に迎えられて窮地を脱します。そして昭王に召抱えられようとする寸前に、令尹の子西に反対され、昭王が陣中で病気で亡くなったため楚の仕官ならず、衛に戻ります。孔子六十三、四歳頃のこととされます。

この頃の衛は、先述したように、太子の蒯かい聶かいと南子の不仲が原因で内紛にまで発展し、靈公の怒りに触れた蒯聶は宋に亡命してしまいました。靈公が亡くなると、太子の息子の輒ちよう（出公）が即位し、諸侯はそのことで衛を非難していました。そこで衛公は非難を緩和するためにも、当時子路をはじめ、孔子の弟子たちが衛に仕える者が多いのを機に、孔子を国政に参与させたいと思いました。「子路第十三の三」に当時のものと思われる孔子と子路の問答が載っています。

子路「衛の殿様が先生に政治をまかされたら、真っ先に何からやられますか」

孔子「先ず名分を正すことから始めよう。君主は君主らしく、臣下は臣下らしくする。

父は父らしく、子は子らしく。今は全くそれが乱れているからね。」

子路「それは先生一寸迂遠うゑんに過ぎませんか。事は急を要する状況です。名分を正している余裕なぞありません」

孔子「お前は粗忽者だ。自分の知らないことには口出しするもんじゃない。

名分を正さないと、発令する政策そのものが曖昧で、道はずれたものになる。

筋の通らない政策は、執務を実行する者たちに納得させられず実効があがらない。

実効があがらないと、秩序・情操を旨とする礼樂による文化が廃れてしまう。

礼樂が振興されない社会は、厳しさと暖かさを併せもった刑罰がなされない。

刑罰が妥当性を失えば、人民は不安で手足の置き場にも迷うようになる。

だからこそ、君子はまず名分を正し、それを言明し、言ったことを必ず実行する。

あやふやで無責任な言葉を吐くようでは、断じて君子とはいえない」

この世に「人間としての道が行われる社会」の実現を目指した孔子の道は、為政者がまず「名を正す」ことだ、という主張から始まりました。衛での事跡については「史記」の「孔子世家」「衛康叔世家」共に次の「春秋左氏伝」からの故事を載せるだけで、際立った活躍ぶりは伝えられていません。

＜衛の卿であった孔文子(孔圉)が、自分の娘を嫁がせた出公の弟・太叔疾^{たいしゅくしつ}が、前妻の妹を囲って、二人妻あるごとき振る舞いをしたので怒って攻めようとした。孔文子が太叔疾を攻めようとして仲尼に意見を尋ねると、仲尼曰く、「胡簋^{こき}(祭器)のことは、則ち管^{かつ}てこれを学べり。甲兵(軍事)のことは、未だこれを聞かざるなり」と。退きて駕(馬)を命じて去らんとして曰く、「鳥は則ち木^{すなわ}を撰ぶ。木^あ豈に能く鳥^よを撰ばんや」と。魯人が弊(進物)を以てこれ(孔子)を召す。すなわち(魯に)帰る。(哀公十一年)＞

「鳥は則ち木を撰ぶ。木豈に能く鳥を撰ばんや」、すなわち鳥である私は自分の意思で止まり木を選択できる。木が勝手に鳥を選んで止めるわけにはいかない。私は衛を去ろう、と。数年衛にいて、弟子の冉有の進言を受けた魯の季康子から招聘があったので、孔子は十四年ぶりに母国・魯に帰国しました。既に六十八、九歳。魯では斉の舞踊団を受け入れた定公が亡くなり、子の哀公が即位していました。孔子は最早執政の座につくことはなく、哀公や季康子の顧問格として政治のアドバイスをしていたようです。この辺の詳しい話は次の章の政治篇で語ることにいたします。

魯に帰ってからの孔子の最晩年は、息子の鯉が五十歳で死に、顔回が四十一歳で夭逝し、子路が衛で非業の死を遂げた以外は総じて平穩・充実した余生であったようです。魯国の年代記である「春秋」を編纂し、三千余篇あったとされる「詩経」を約三百篇に整理し、異説はあるものの、「易経」を「韋編三絶^{いへんさんぜつ}(書物の閉じ紐が三度切れる)」(「史記」・孔子世家)するほど読んで周易の注釈書を作り、魯や衛に仕官した弟子たちを教える等、古典研究と教育に没頭しました。

紀元前四百八十一年、孔子が七十歳の頃、哀公が狩をして麟を獲ました。哀公はこれを不吉なりとして山沢の管理者に下賜します。孔子はこれを観て「麒麟である」と言ってこれを納め記録に止めました。「子の燕居^{えんきょ}は申^{しん}申^{しん}如^{じょ}たり。夭^{よう}夭^{よう}如^{じょ}たり」と「述而第七の四」にあるように、「七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」、もう孔子は人間も枯れ、氣負うこともなく、にこにこのびのびと弟子に囲まれて燕居していたのでしょう。

孔子の死については、「礼記」・檀弓篇に次のように述べられています。

＜孔子がある朝早く起き、片手を背中にのせ、片手に杖を引いて門のあたりを彷徨^{さまよ}っていた。歌って曰わく、「泰山が崩れるのか、梁の木が壊れるのか、哲人が今消え去るのか」と。そう歌って家に入り戸口に向かって座った。子貢がこれを聞いて言うには、「泰山が崩

れ、梁の木が壊れ、哲人が今消え去ったら我々は何を仰ぎみたらよいのか。先生は將に病に倒れようとしておられる。』そして急いで孔子の部屋に行った。孔子は子貢の来るのを待っていた旨を伝え、柩の安置についての夏・殷・周三代の古習慣を述べた後、天下に道が失われ自分を尊ぶ人はいないと言い、死期の間近いことを述べた。それから病で寝ること七日目孔子は没した。>

享年七十三歳ないしは七十四歳でした。哀公も深く悲しみ、公の弔辞が「春秋左氏伝」には次のように記載されています。

<夏四月^{つちのとうし}己^つ丑^{ちう}、孔丘、卒す。哀公、これを誄^{るい}して（弔辞を賜り）曰く、「^{びんてん}旻天弔せず。しばらく一老を^{のこ}遺し、余一人を^{われ}屏（おお）い以て位にあらしめず。独り寂しく身も病に侵されるがごときなり。嗚呼^あ、哀しいかな^あ尼父^{じふ}（孔子よ）。自ら律するところなし。』と。（哀公十六年）>

弟子たちは三年の喪に服してそれぞれが号泣して別れ去りました。何人かの者がその後もしばらく残っていたようですがやがて去り、一人子貢だけが墓の側に庵を結んでさらに三年の喪に服した後ようやく立ち去ったということです。（「史記」・孔子世家）